

文豪先生

bungousensei

第三話

中川善史

絵・かないてつお



その翌日もいい天気だったのであります。

もちろん、この村も、いつもいつもいい天気ばかりではないのでございます。雨の日曇りの日雪の日、色々あるのでございます。たまたまこのところ好天が続いたのであります。

この点、お読みになる方によつては、不審を抱かれるのではないかと心配いたしましたので、作者、ひと言申し上げた次第でございます（心配性）。

文豪先生が庭に

立つてあたりを眺

めていますと、

薄茶色の一本の

紐のようなものが

落ちていました。ただの紐

ではございません。毛羽立って

いて、ふわふわとして見えます。

「はてな」



と、ステツキの先でつついてみると、ぐねぐねつと蛇のように動きましました。

「わっ」

先生は、後ろへ飛び退きましたが、紐のようなものは、まだ、生き物のごとくに、のたうつて動いています。

不思議そうに見ておりますと、家の中から、ろんろんがやって来ました。

「先生、何かあつたか。叫び声が聞こえたぞ」

「なにか、動く紐のようなものが落ちているんだ。生き物だろうか」
「ああ、これか」

と、ろんろんは恐れる様子もなく、それを拾い上げました。

「これは、ろんろんの尻尾だ。ときどき抜けて生えかわるのだ」

ひよいとお尻を見せると、確かに今日は尻尾がありません。

ろんろんは、穴を掘ってそれを中に埋め、土をかぶせてしまふと、ぶつぶつと拝んでおります。

「次は、いい尻尾が生えてきますように」

「なんだ、次は、というところを見ると毎回違う尻尾が生えてくる

のか」

「毎回、違うのが生えてくるのだ。季節によるものか体調によるものか、ろんろんにもよくわからないのだ。今までののは、猫みたいなの尻尾が生えていたが、さて、今度は、たぬきの尻尾が生えて来るやら、きつねの尻尾が生えて来るやら……」

「ほう、なんだか、面白いな」

と、先生は感心したようにあごをさすりましたが、

「面白いことばかりでもないのだ。以前、クジヤクの尻尾が生えてきた時は、ろんろんもびつくりしたぞ」

「クジヤク？」

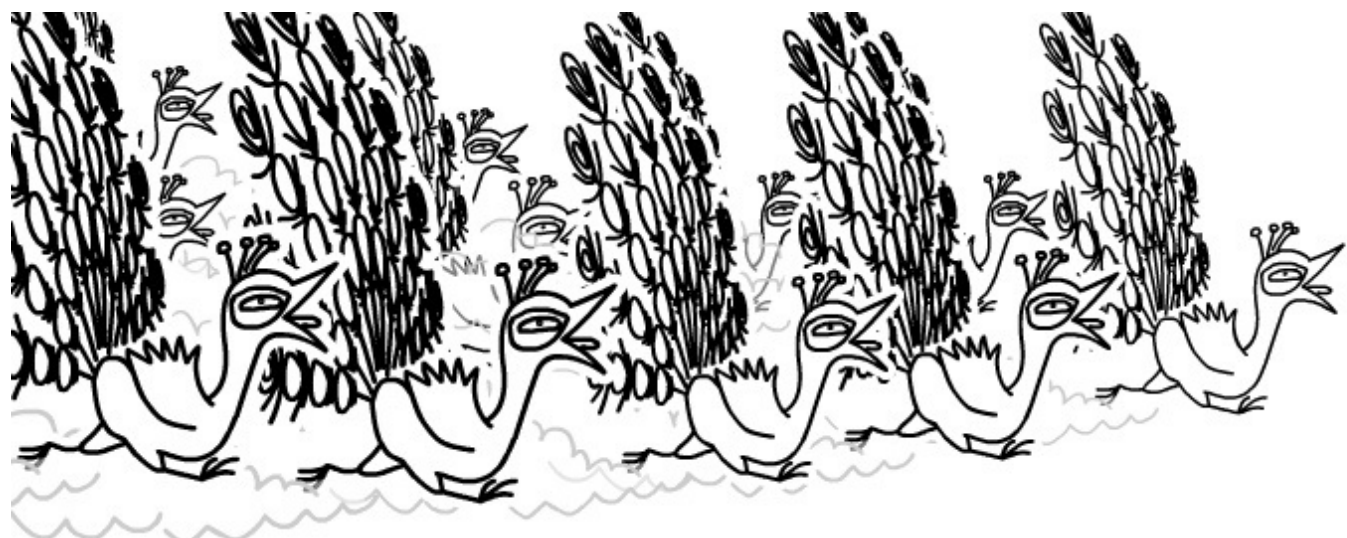
「うん。クジヤクの羽は、派手で恥ずかしかつたな。なんだか、毎日がタカラヅカのファイナーレみたいで落ち着かなかつたぞ」

「なるほどな」

と、先生はろんろんがクジヤクの羽根をつけているところを想像しようとしているようです。

ろんろんは続けて、

「それだけならいいが、クジヤクの雌にもててしまつて、ろんろん



の追っかけが出来てしまった」
「なに？」

「毎日毎日、メスのクジヤクの群れがろんろんを追っかけてくるのだ。先生、ろんろんは、タカラヅカの男役に似ているのだからか」

「こんなところに野生のクジヤクがいるもんか」

その時、文豪先生の背後をクジヤクの大群が走りすぎたのですが、先生は気がつかなかったようです。

「馬鹿馬鹿しい。日本に野生のクジヤクがいるだなんて」

と先生は家の方へ歩きながら、
「うん？ こんなところに鳥の足



跡がいつぱい付いているな」と呟きました。

「ところで、先生、今日は地蔵のところ取材に行かないのか」

先生の後ろから、ろんろんが話しかけます。

「うーむ。行つてもいいのだが、いつも喧嘩別れみたいになつて帰つてくるからな」

と、先生は縁側に腰をかけながら答えました。ろんろんは笑つて、

「でも、なんだか、先生、その後はすごく生き生きして見えるぞ。地蔵と遊ぶのが楽しいんじゃないのか」

「遊びに行つてゐるわけではない。取材だと言つてゐるだろう」

「じゃ、取材に行こう」

「え？」

「ろんろんも行きたい」

「だから、遊びじゃないんだつて」

「ろんろんは召使いだ。先生の送り迎えをするぞ」

「え？ 車があるのか」

ろんろんは、得たりとばかり家のなかに飛び込むと、ちいさなケージを持って出てきました。

「なんだ、それは」

「これは、ろんろんが飼っているハムスターのハムーだ」

ハムスターをケージから出して、手のひらに載せ、

「大きくなれ！」

と声を掛けると、どーんと大きな音がして、煙とともに牛ほどもあるハムスターが現れました。

「な、な、なんだ、これは！」

と、文豪先生は、びつくりして縁側から転げ落ちていきます。

「あまり大きな声を出すな。ハムーが驚く



「じゃないか」

「驚くのはこつちだ」

今度は、ろんろんは、庭の隅にある物置小屋の裏から、リヤカーを引つ張り出してきました。それをハムーにつなげると、牛車のハムスター版、それをうんとオンボロにしたようなものができました。

「先生、車に乗れ」

「こ、これに乗るのか」

「そうだ」

「いきなり走り出したりしないだろうな」

「大丈夫だ。ハムーはおとなしくて利口なハムスターだ」

ハムーの後ろのリヤカーに座っている着物姿の文豪先生を見て、ろんろんがお腹を抱えてげらげら笑い出しました。

「ろんろん、私がリヤカーに乗っているのがそんなにおかしいか」

「いや。笑ってないぞ。ただ、先生がハムーやリヤカーにあまり似合うんでびつくりしたただけだ。なんというか、そう、えれがんとだな」

ろんろんが、ハムーの背中に乗つて声をかけると、車はゆっくり動き出しました。



さて、こちらは地蔵であります。

地蔵のところろに、昨日来た村立文化財保護調査研究所の夏目民子が今日も来て、地蔵にぺこぺこ頭を下げています。

「いや、昨日はびつくりしたぜ」

「本当に失礼いたしました」

と、民子は本当にすまなそうに、伏し目がちになつて言いました。

「いや、俺を拝んでいるのかと思つたら、そのまま地面に突つ伏して眠りこけているんだものな」

「すみません。わたし、本当に駄目なんです。時々、大事な時に眠り込んでしまう癖があるんです」

「そりゃ、困るだろう」

「実はここに来る前も……」

「なにか、あつたのかい」



「わたし、歴史や民俗の研究者を

目指していたんです。で、この前、研究会があつて、わたしがそこで報告することになつていたんです。

わたしにとつては、そこがデビューの場というくらいの気持ちでいたんです。それが、壇上に上がった途端、意識がぶつつりなくなつてしまつて……」

と、民子は溜息をつきました。地藏は、同情したように、

「寝ちまつたのかい」

「はい……目が覚めた時は、会はとつくに終わつていて、掃除のおばちゃんがわたしの顔をモップがけしているところでした」

「ありやあ」

「わたし、ショックでした。落ち込みました。もう、研究の道はあきらめようかと思ひました。その時、この村で研究所を設立して職員を募集していることを知つたんです……わたし、この村で、もう一度やり直してみようと思ひました。村の生活にどっぷりつか



ながら、自分の生き方を見つめ直したり、勉強をしてみようと思つたんです」

「お嬢さん、えらいねえ」

「えらいだなんて、とんでもない」

民子は慌てて否定しました。

「わたしの他にも、いろいろな方が応募したようですが、あまりに辺鄙な辺鄙な辺鄙なところで、ここまでたどり着けない人も多かったです。たどり着けた何人かの人も、今度は出ていけなくなるんじゃないかと不安になつて辞退してしまつたと……」

「あんたは平気なのかい」

「まあ、宿舎も村の元小学校の教室、仕事場もその隣の教室、しかも、その元小学校校舎は村役場も兼ねているし分校も兼ねている、研究所の職員は一人つきりで、なにもかも自分でやらなきゃならぬ、という環境は、わたしみたいな甘つたれにはきついかもしれないんですけどね」

と民子は少し苦い笑いを浮かべましたが、それを振り切るように、「わたし、この村の村長さんが大好きになつたんです。とてもまつ

すぐな女性で、本当に村の皆さんのことを心から考えておられて、なんでも自分から動いて面倒を見ておられる。この人のもとでお仕事が出来るのは幸せなのかも知れない、つて思っただんです」

「ふうん。しかし、お嬢さん、都会から一人移り住んできて、寂しいこともあるだろうよ」

「寂しいなんて言ったらバチが当たります。わたし、……でも」と少し声のトーンが下がりました。

「でも？」

「本音を言えば、ちよつぴり寂しいですね。いや、ちよつぴり、じゃないかな……」

心持ちうつむいた民子のその横顔を見て、地蔵の中で何かがぱちんとはじけたようでした。

「民さん、あんたは野菊のような人だ……」

「は？ なにか、おつしやいました？」

地蔵は、ふつと息を吐いてためを作ると、天保年間に生まれてから今まで出したことがないような渋い声で、

「お嬢さん……人は皆、誰でも寂しいのさ」

「はあ」

民子の方は、地蔵の変化にあっけにとられて
います。

「そして、寂しい時は、誰かに頼るつてのも
少しも恥ずかしい事じゃない」

「誰かに・・・頼る？」

「寂しい時はな・・・」

「はい」

地蔵は、思いつきりきぎな顔を作りました。

これまた天保年間以来です。

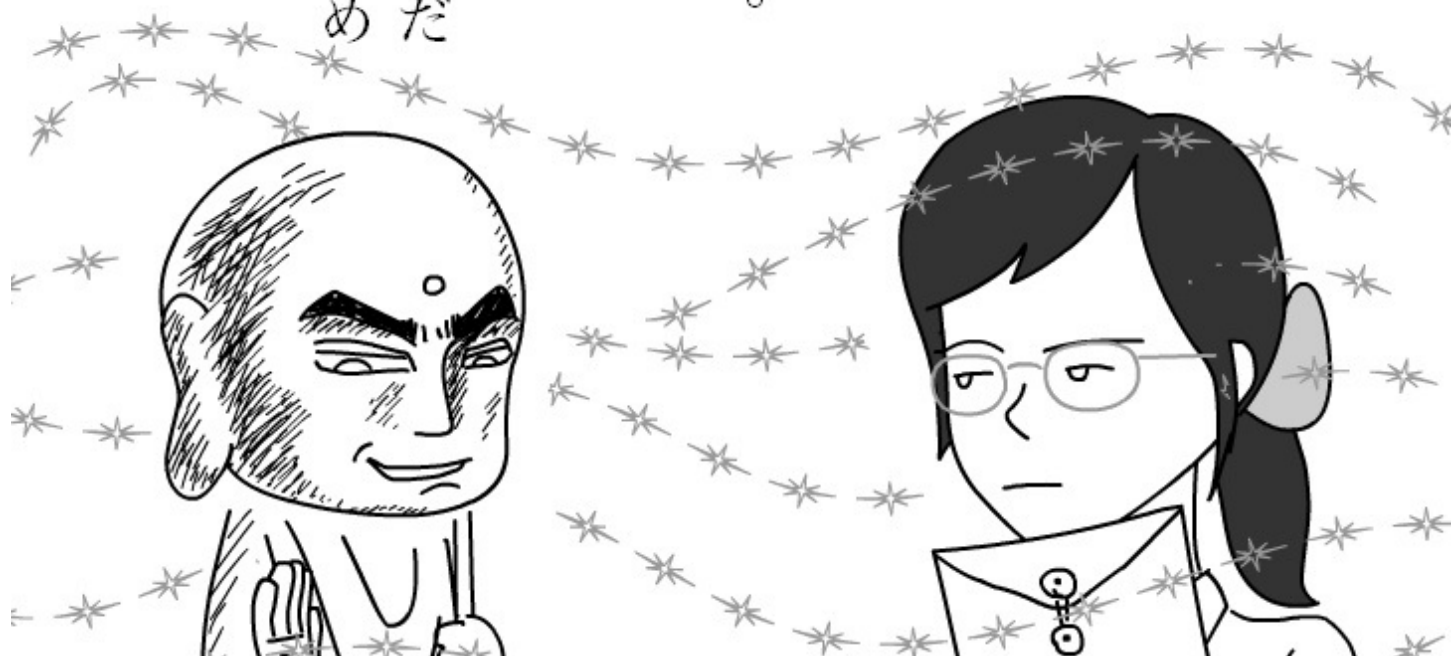
「俺のところへ来ていいんだぜ」

「お地蔵様・・・」

「そうさ、お嬢さん・・・寂しい胸の内を吐きだ
してご覧よ。少しは楽になるからさ。そのため
に、俺達、仏つてもものがあるんじゃないか」

民子の顔が和らぎました。

「お地蔵様、やさしいんですね」



「いや、なに」

さらに、ふつと息を吐いて、さらにきざぎざ度を高めて

「お嬢さん、覚えておきな。それが・・・仏の大慈悲つてやつよ」

決まった、と、地蔵は胸の内て呟きました。ところが、民子の方は、
は、

「でも、お地蔵さんは、本当の仏様にはなっていないんですよね」

と、さらつと言いました。その言葉が、地蔵の胸に突き刺さりま
す。

「ぎくうつ！・・・！」

地蔵の顔がゆがみ、固まってしまいました。民子の方は、はつと
気がついて、

「ごめんなさい。ごめんなさい。わたし、ほんとにダメなんです。

ときどき、言つちやいけないことをぼろつと言つちやうんです。昨
日、その木の陰から、お地蔵様とあの方・・・文豪先生という方
がお話しているのを立ち聞きしてしまつたんです」

天空から金槌が落ちてきて、目の前の光景がガラスのように割れ
ていくかのようでした。固まっていた地蔵の顔は、今度はくしゃく

しやになつて、涙がぼろぼろと流れてきます。

「ぼ、ぼ、ぼ、ぼーくはじぞう……わるいやつらを、やつつけない……」

か細い声でうわごとのような『地蔵マーチ』がその口から漏れてきます。

「ごめんなさい、ごめんなさい、お地蔵様、こわれないでください、気を確かに保つてください……」

「そ、そ、そ、そうだよ、僕は、入魂の儀式が済んでませーん。はんぱな、じぞうでーす。できそこないでーす」

「ごめんなさい、お地蔵様、でも、そんなこと問題じゃないです。それだけ優しい心がおありなら、仏様以上の仏様です。本当です。儀式は儀式に過ぎないじゃありませんか。本当に人々に愛されてきた仏様は、お地蔵様のような仏様だと思います」

青ざめて石の地蔵のようになっていた地蔵（石の地蔵なんです）の顔にかすかに生色が甦り、

「そ、そう？」

「はい」

「そうだよな」

地蔵の声にだんだんと力が戻ってきました。

「はい、絶対に」

「儀式なんて形式だよな」

「はい」

「本当の仏教だましいは、俺みてえな、野の仏の胸の中にこそ、熱く燃えさかってんだ。そうだろ？」

地蔵の声に、次第に熱がこもってきます。

「は、はい」

「わかってるじゃないか、お嬢さん、いえい、べいべー・・・形式に墮した仏教なんかなんだー！仏は葬式屋じゃないってんだ！魂を忘れた腑抜け坊主は地獄に墮ちろってんだ！」

「うわー」

民子、やや引き気味です。ついに地蔵は叫び始めました。

「かもんべいべー、ろけんろーる！愛し合ってるかーい！」

「燃えてきちやいましたねえ」

「おーけー、べいべー、みんな、俺のロツク魂を見てくれ、いえー！

Rock'n Roll

一切衆生



おーれは ひーろー
すーぱーじぞう！
わるいやつらをやっつけねえ
じぞうパンチを くりださねえ
じぞうろけっと はっしゃしねえ
じぞうじえっとで とんでかねえ
だって おれは いしのじぞう
めったなことでは うごかねえ
よい子が呼んでも
知ったこっちゃねえ
いしだもんなー
(地藏ロック)



「いえー！ さいつこうに、あついでー！ なあ、お嬢さん」

「は、はい」

「俺は、仏教はロックだと思っただ！ どうだい、俺の考えは！」

「……すみません、いまいち、ぴんと来ないんですが」

「あ……そう？」



そこへなにやらラツパの音が聞こえてきました。

音のする方を見ると、向こうからハム―に引かれたりヤカーに乗って文豪先生がやって来ます。

「ろんろん、もう少し早く走れんのか」

「ハム―はハムスターだからな。手加減しているのだ。実力を出したら、先生なんか振り落とされるぞ」

「なんだか、こんな車に乗ってのたのた動いていると、さらし者にされているような気がする」

「そんなことないぞ。えれがんとだぞ」

「おまえ、そのラツパ吹くのと紙吹雪まくのとクラツカー鳴らすのやめろ」

「でもパレードは派手にしなくちや」

「お前、やつぱり遊んでいるな」

文豪先生たちが到着すると、地蔵は驚いた顔で

「なんだ、そのでつかいネズミは」

「ネズミではないぞ、ハムスターのハム―だ。わたし、ろんろんの

可愛いペットだ」

「ろんろん？ お前は、あの文豪先生の家には憑いている変なやつだな。何しに来た」

「今日は、文豪先生の運転手だ」

「運転手？ でつかいネズミに大八車引かせてラツパは吹くわ紙吹雪は舞い散るわ、なんの見世物だ」

「まあ、今日は自家用車で」

と、車から降りながら文豪先生が答えます。

「自家用車だ？ 歩いてこい。こつちが恥ずかしい」

先生は、民子の方を見て、

「ところで、今日は、あんたのところに来客か。珍しいな」

「お前らには関係ない」

民子は文豪先生に頭を下げ、

「夏目民子と申します。新しくできた村立文化財保護調査研究所というところで働くことになりました。村役場の二階に住み込んで仕事をしています。文豪先生でいらつしやいますね」

先生、民子が自分の名前を知っていたので、少し得意げに鼻をこ



すつて

「ほう、私の名を知っておられるとは。私はそんなに有名だったのか」

「ちがうよ。彼女、昨日の俺達の話聞いてちやつたんだよ」

と地蔵が先生の誤解を訂正します。

「村に赴任して、作家の方とお会い出来るなんて幸運です。いろいろ、教えてください」「こんな三文文士に教えてもらおう事なんて何もねえよ」

「もちろん、お地蔵様にもいろいろ教えていただきたいんです。実は、昨日、偶然、お地蔵様と先生がお話になつているのを立ち聞きしてしまつたんですが、お地蔵様って私のような者にはすばらしい存在なんです」
それを聞いて地蔵、でれーつと顔を赤くして、

「そ、そうかな、そんなにすばらしいかな。確かにすばらしくなくはないと思うんだけど、たとえば、どんなところ？優しいところ？立ち姿？ 歌声？ ロック魂？」

「お地藏様はご自身が文化財であるだけでなく、お話になることが出来るじゃないですか。文化財ご自身にその来歴とか村の昔のこととか語っていただけけるなんて、願ってもないことですよ。ぜひ、これは、いろいろな事を教えていただきたいと思つて、ご挨拶に伺つたんです」

「そ、そんなことか。なに、なんでも聞いてくれ、お嬢さん」

地藏はちよつとうつむきました。こんなことなら、ひねくれて村に背を向けたりせず、もつといろいろなことを見聞きしておけば良かったな、と思つたのです。

民子は晴れやかに言いました。

「今日は、お二人とお知り合いになれて、とてもうれしいです」

「ろんろんは？」

「あ、ろんろんちゃんとも。・・・わたし、今日はこれで戻りますが、また、お会いして、いろいろお話しさせてください。ありがとうございます」

「ございました」

そういつて、村の道を分教場の方へ戻つていきました。

三人は民子を見送つていました。民子は道がカーブを描くところまで来ると、振り返つて大きく手を振り、そして、木々の陰に姿を消しました。地蔵は、民子が見えなくなると、ぎつと文豪先生の方に振り向きしました。なんだか目の色が変わつています。

「おい、文豪先生。小説のストーリーが出来たぜ。これを書いてくれ」

「なんだね、それは」

「ある日、イケメンの地蔵（おれ）と村立文化財保護調査研究所に赴任してきた女性研究者が偶然、村の道で出会う」

「ほう」

「二人は互いを一目見て恋に落ち、幸せな恋をして、幸せな結婚をして、幸せな家庭を築いて、いつまでもいつまでも幸せに暮らす」

「それで」

「めでたしめでたし」

文豪先生は呆れて、

「山も起伏もなにもないな」

「起伏はなくても、あふれる情感がある」

「どんな」

「幸せな幸せな幸せな・・・」

「そんな単調なの書けるか」

と文豪先生は吐き捨てるように言いました。

「じゃあ、ちよつとした波乱を起こそう。悪の組織の首領・山田文豪とその手下・ろんろんが二人の結婚を妨害しようとして襲ってくるが

二人は力を合わせて撃退したのでした」

「ろんろんは、悪の組織なのか」

と、ろんろんが不満げに割り込んできました。

「あつたりめえよ。もう題名も決まっている」

「なんだ」

「『予言の書』だ。早く書いてくれ。まごまごしていると『実現の書』になってしまうからな」

「ろんろん、悪の組織、やだー」

「お前は、悪の組織なの。俺と民子さんに、けつちよんけつちよんにやられるの」

「やだー」

と、ろんろんは、ハムーの背中に飛び乗ります。そして、

「ハムー、やれー!」

と、けしかけます。

すると、ハムーは地蔵に飛びかかり、ひよいと持ち上げると自分の背中に乗せて、すごいスピードで走り出しました。

「行け!ハムー!ハムスター走りの神髓を見せてやれ!」
「なにするんだ。やめろ、お





移動手段見つかったじゃないか」

さて、地蔵と民子は、いつたいいかなるところに相成りましようや。次回に続きます。

(つづく)

ろせ、こわい、落ちる！」
地蔵とろろんとハムーの姿は、土埃とともにたちまち見えなくなりました。取り残された文豪先生、それを見送りながら呟きます。

「地蔵の恋、か」
しばらく黙って何事か考えている様子でしたが、やがて、ぽんと手を打って、
「地蔵、あいつ、



文豪先生 第三話

<http://p.booklog.jp/book/25989>

著者：中川善史

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

発行所：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/25989>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/25989>